

推薦図書

『開国の使者 ハリスとヒュースケン』
(オンデマンド版)

宮永 孝著
雄松堂出版

推薦教員
日本伝統文化学科
山下 琢巳教授

ヘンリー・ヒュースケンという人物をご存じでしょうか？

岩波文庫に『ヒュースケン日本日記』という一冊があります。日記は1855年10月25日に始まり、1861年1月8日で終わっています。

1853年6月、浦賀沖にアメリカのペリー艦隊4隻が来航、幕府に開国を迫ります。そして、翌1854年1月16日、ペリーは今度は7隻の艦隊を率いて再び来航、幕府は3月3日に横浜村で日米和親条約を締結しました。

しかし、この条約には通商条約が含まれていませんでした。1856年7月21日、この条約を結ぶためにアメリカ公使としてやってきたのが、タウンゼント・ハリスです。そして、その時、通訳として一緒にやって来たのがヒュースケンでした。オランダ生まれでアメリカへ移住したヒュースケンは、英語とオランダ語の読み書きができました。

ペリー来航前後から、日本の通詞も英語をある程度理解できるようになっていました。しかし、公用語としての外国語はオランダ語でした。交渉にはオランダ語が理解できる通訳が必要でした。

下田にふたりがやって来たとき、ハリスは53歳、ヒュースケンは23歳と親子ほどの年齢差がありました。ふたりの激動期の日本でのおよそ4年半におよぶ生活が始まります。

本書は、「おつるとヒュースケンの遺児」という口絵の写真から始まっています。また、本文には「ヒュースケンとお福」という章段もあります。

これより以前の1827年、鎖国下の日本にオランダ商館付き医師として長崎の出島にきていたシーボルトと丸山町遊女であった瀧のあいだにイネという女性が生まれています。このイネについては、司馬遼太郎の『花神』で、主人公大村益次郎に恋するヒロインとして描かれています。

また、幕末期に来日した欧米人のなかでもっとも名のよく知られたアーネスト・サトウは、1871年に武田兼を内妻として、3人の子どもをもうけています。

青年ヒュースケンが日本に来て付き合った女性は？

また、日記はなぜ突如終わっているの？

本書を読んでみることをお勧めします



配架場所:4階書棚7番
請求記号:289.3||Mi 79

ぜひ、読んでみてください。